日本史アップデート

磐井の乱

ここに注目！

・6世紀前半にヤマト王権と争った北部九州の大豪族・筑紫君磐井の実像に迫る研究が進んでいる。全国で初めて確認された、よろいをまとった馬の埴輪は、朝鮮半島の新羅と強い関係を築いていたことを物語る。
・磐井が敗死した後も、一族は王権の支配体制に組み込まれ、地方を治めた。出土土器の年代から、一族は100年にわたり、磐井が築いた岩戸山古墳（福岡県八女市）に埋葬されたと考えられる。
・岩戸山古墳は、激しく争った継体天皇の墓とみられる今城塚古墳（大阪府高槻市）と形を一にする。かつてはかなり近しい関係だったことがうかがえる。

外交の一元化巡る争い

古墳時代最大の内戦「磐井の乱」（527年）でヤマト王権に敗れた北部九州の大豪族・筑紫君磐井は、反逆者として歴史に悪名を刻まれた代表格だ。近年、その実像や歴史から消えた「その後」に迫る研究が進んでいる。

律令国家による初の正史・日本書紀によると、継体天皇のヤマト王権は、朝鮮半島南部（加耶地方）に進出した新羅に対抗し、軍勢を派遣しようとした。これに対して磐井は、新羅から賄賂をもらい、海路を遮断するなど妨害し、挙兵した。

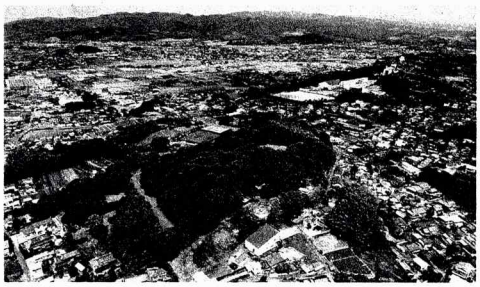
磐井が独自に半島と外交を行っていたことは文献史料から読み取れる。加えて、磐井と新羅のつながりを考古学的に検証できる資料として注目されているのが、九州歴史資料館（福岡県小郡市）の調査により全国で初めて確認され、10月に公開された、よろいをまとった馬の埴輪だ。

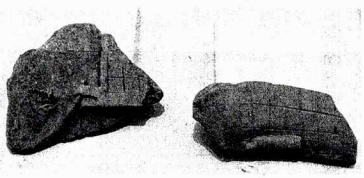
埴輪は、磐井の墓とされる北部九州最大の前方後円墳・岩戸山古墳（長さ約135㍍）で出土したもの。実際の馬用のよろい（馬甲）は、かつての新羅地域で集中的に出土している。同館の小嶋篤学芸員（古代史）は「磐井は馬甲を新羅から入手し、重装騎兵部隊を整備していたのではないか」と指摘し、磐井の乱が新羅軍も参戦した国際的な戦争だった可能性も示唆する。

磐井の乱は「日本列島統一を目指すヤマト王権と、その中央集権体制に反発した地方豪族の盟主との争い」であると同時に、外交の一元化を巡る争いでもあった。

1年半に及ぶ激闘の末、磐井は斬られ、息子の葛子は博多湾周辺の外交の拠点だったと目される「糟屋屯倉」を王権の拠点として献上した。日本書紀の磐井の記述はそこで終わる。だが近年では、磐井の死後も筑紫君自体は王権の統治機構に組み込まれる形で存続し、外征の軍役や労役を課せられる地方官「国造」になったことが定説化している。

実際に、磐井の権威の象徴で、生前に築造したとされる岩戸山古墳は破壊されておらず、出土土器の年代から、乱の後100年近くにわたって筑紫君一族が葬られ続けたことがうかがえる。岩戸山を中心とする八女古墳群や熊本県北部の古墳群からは、磐井の死後に八女地方で作られた土器や、人をかたどった独特な石製表飾（石人）などが広く出土しており、磐井の文化が続いたことが分かる。


木々に覆われた前方後円墳の岩戸山古墳
（中央、福岡県八女市で。小型無人機から）


線刻でよろいを表現した馬形埴輪の破片（九州大大学院考古学研究室所蔵）

日本書紀に「西の果てのずるいやつで、道徳に背き、高慢でうぬぼれている」と、あしざまに書かれた磐井。かつては王権に仕えていたことが想定される記述もあるが、近年は考古学的にも、継体天皇とかなり近しい関係だったことが具体的に見えてきている。

同館が11月30日、福岡市で開催したシンポジウムで、福岡県久留米市文化財保護課の小澤太郎主査（考古学）は、継体天皇の墓と目される今城塚古墳と磐井の岩戸山古墳が、大きさこそ違うものの、形はほぼ同じだと報告した。さらには、継体天皇の妃の墓とみられる断夫山古墳（名古屋市）や、皇后の墓とされる西山塚古墳（奈良県天理市）とも相似形をなすという。

小澤主査は「今城塚の大きさを10とすると、断夫山8、岩戸山7、西山塚6。偶然同じ形になったとは考えられず、継体天皇の近親者や、支援や擁立に大きな功績のあった人物のみ、同じ形に築造することを許されたのではないか」と分析。「磐井もその一人だった可能性が高い」と話す。

視点を変えると、磐井は広域道や灌漑施設といった社会基盤の整備を進め、朝鮮半島や九州の他地域との交流で有明海周辺地域を繁栄させた英雄だった。それだけに倒すべき強敵として中央の権力者の記憶に長く残ったのだろう。筑紫君一族の盛衰は、日本国の成立過程と密接につながる。

（若林圭輔）

参考文献　小田富士雄『古代九州と東アジアⅢ』（同成社）、柳沢一男『筑紫君磐井と「磐井の乱」・岩戸山古墳』（新泉社）、宇治谷孟『日本書紀（上）　全現代語訳』（講談社学術文庫）